

博物館だより

NO.22

SUITA CITY MUSEUM



琵琶（銘箕面）国立歴史民俗博物館蔵

平成16年度特別展
(2004年度)

ことのしらべ ―琵琶法師から当道座へ―

会期 平成16年4月29日(祝)～6月6日(日)

古代においては琵琶・箏・琴・和琴などすべての弦楽器をさして「こと」と呼んでいました。これらの楽器は主に雅楽に用いられ、継承されてきました。このうち、琴は平安時代にすたれ、和琴は神楽などの神事で演奏されています。しかし、琵琶・箏については雅楽などで演奏される一方で、目の不自由な琵琶法師やその系譜を引く当道座の人々によって新たな音楽が創始され、広まりました。

琵琶法師は、琵琶の伴奏で平家物語を語る芸能者です。琵琶法師は目が不自由で僧の姿をしていました。藤原明衡が著した『新猿楽記』には、都で流行した猿楽の一つとして「琵琶法師之物語」をあげています。『新猿楽記』の成立した11世紀半ばには、琵琶を弾きながら物語を語る琵琶法師の芸能が知られていたのでしょう。目の不自由な者には神秘的な力があり、また琵琶の音にも呪術的な力があると信じられていました。そのため琵琶法師は、疫神や怨霊を祓う祈祷や鎮魂の物語や

寺社縁起などを語っていたと考えられます。やがて琵琶法師たちの中から平家物語を語る平曲琵琶法師が現れました。琵琶法師の語りは、『平家物語』の原型が作られ、その形を整えていく過程に大きな影響を与えたと考えられています。平家の栄華と滅亡を語る『平家物語』は、神秘的な力を持つと考えられた琵琶法師に語られることによって、いっそう哀感を増し、死者への慰めとなると考えられたのでしょう。琵琶法師は寺社の境内や貴族の持仏堂などで語りを行いましたが、これらの場は現世と異界との通り道であるとされています。琵琶法師の語りは単なる物語・娯楽ではなく、死者を鎮魂するものととらえられていたと思われます。

平曲琵琶法師は鎌倉時代ごろから当道座を組織し、座の琵琶法師だけが平曲を語ったり、京周辺で語りを行うことができる特権を獲得しました。座に属さない琵琶法師は『地神経』などを唱えて竈祓え等をして歩きましたが、当道座の琵琶法師



佐賀県指定文化財 たちあいまきえらでん
立葵 蒔絵螺鈿等 多久市郷土資料館蔵

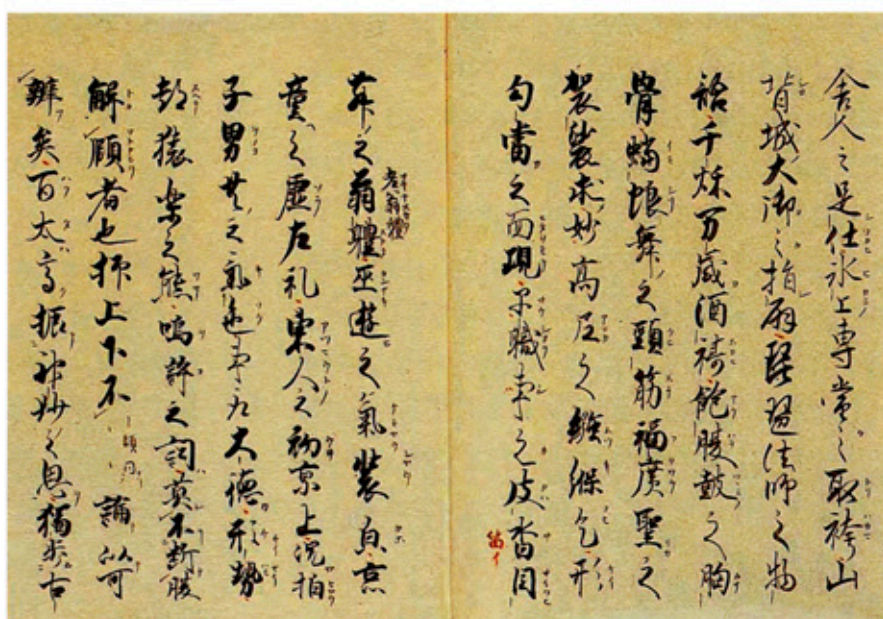
から排除されて九州・四国など地方で活動していました。当道とは「自分たちの芸能」という意味で、もともとそれぞれの芸道を指す言葉でしたが、琵琶法師らの組織した団体に使われるようになりました。南北朝期になって平曲の中興の祖といわれる明石覚一が当道座の組織を整えたとされています。彼は検校などの職階を作り、当道座の式目と呼ばれるきまりも定めたといわれています。また、彼の最大の功績は『平家物語』を整理し覚一本を完成させたことでしょう。これは現在もっとも流布している語り本系『平家物語』として知られています。覚一本の詞や文章は当道座における

主流となったのです。覚一本の完成した南北朝期から室町時代にかけて平曲が最も隆盛しました。公家の日記などにたびたび宴席や法事で平曲が語られたことが記されています。

当道座は京都を中心に活動していましたが、戦国の動乱で京都が荒廃したことから地方に分散し、やがて室町時代末期に当道諸座の統一が行われ、制度化が進みました。さらに、江戸時代になると当道座の組織は幕府から公認され、惣検校を頂点とする組織が整えられました。そして、当道座に属する人たちは琵琶を用いる平曲の他に三弦（当道座では三味線を三弦という）・箏を用いた音楽にたずさわることになりました。三弦は室町時代末期に中国から沖縄を経て日本に伝わった楽器に、当道座の人々が改良を加えたものといわれています。当道座の人々が演奏した歌を伴う三弦の音楽は地歌、箏を用いた演奏は箏曲と呼ばれています。三弦

の名手であった八橋検校は、三弦の調弦法を参考にして箏曲に半音を加えた調弦法を取り入れ、新たな箏曲を作曲しました。江戸時代以後の箏曲は八橋検校の箏曲から発展したものです。その後、当道座では地歌・箏曲が主な芸能となりました。

今回の展示では琵琶・箏などの「こと」の音楽の変容を琵琶法師と当道座の人々の立場から紹介します。この展示にあわせて平曲や八橋流箏曲の演奏会を企画しています。展示や演奏会・講演会を通じて、平曲や箏曲の世界に親しんでいただきたいと思います。



新猿楽記 陽明文庫蔵



平家物語 龍谷大学大宮図書館蔵

「大工仲間岸部組」その後

平成15年（2003）10月18日から～11月30日にかけて、博物館では平成15年（2003）度特別陳列として、『江戸時代の大工さん－摂州大工仲間岸部組－』を開催しました。この展示では、江戸時代に摂津国嶋下郡の西部と西成郡の一部の大工たちが組織した大工組「岸部組」の成立とその活動を主に紹介しました。

「岸部組」のような大工組は、江戸幕府によって幕府の御用作事を勤めさせるために組織され、畿内と近江の六か国の大工組は江戸幕府の行政機関であった京都の中井役所の支配を受けていました。幕府に代わり、明治政府が樹立されると中井役所ともども大工組もなくなりました。しかし、岸部組に属する大工たちが居住していた村々であった山田、岸部地区などでは、現在でも他地域に比べて大工さんが多いことに気がつきます。実際、山田、岸部地区において、「かつてどのような職人がおられましたか」と古老の方々にお聞きすると大工さんの名前がたくさんあがってきます。つまり、大工組がなくなって以降も大工職は受け継がれていったことがわかるのです。そこで、今回は

このような大工さんについて信仰面を中心に少し紹介してみることになります。

同地区には代々大工を営むといった家があり、こうした家では子どもたちは親の元で大工の修行をし、その技術が伝えられていくのですが、近郷から弟子入りの依頼を受けることも多かったようです。戦前までは学校を卒業するとすぐに弟子入りすることが多く、20歳の徴兵検査前後に年季が明け、以後一人前の日当をもらえるようになります。修行時代は朝早く起きて、掃除や道具の手入れをし、夜は仕事が終わった後も早く一人前になれるように大工の技術書を読んでいたといえます。習得していく技術は鑿^{のみ}などによる穴掘り、次いで板を削る鉋^{かん} 使い、墨付けと順々に覚えていきました。いい仕事をする大工は特に道具を大事にし、道具の入手は兵庫県の三木まで買いに行くこともあったようです。

家を建てるにあたっては、家作りに関係する左官、瓦職、畳屋、時には井戸掘りまで大工が手配したようで、岸部では瓦屋として寺内の鈴木瓦店や市場の瓦常商店とつきあいがありました。

信仰に関しては、聖徳太子を信仰する太子講は、岸部では早くに廃れたものとみられ、その様子を聞くことはできないのですが、山田では戦前まで山田の大工の親方5、6人で大工の組合（山田組）が組織され、太子講も1月と8月の年2回行われ、組長の家に集まり、親方たちが持ち回りで保管している聖徳太子の掛け軸を床の間に飾り、大工の日当を決定したりしていたといえます。また、正月には墨壺^{すみづぼ}と墨芯^{すみし}、チョンノ^{ちような}（手斧）、曲尺^{かねじかく}を床の間に祀り、お鏡餅をお供えしていた家もありました。1月2日は仕事始めで、1寸角程度の杉で1間、1間半、2間の間竿を作り、墨壺と墨芯で目盛りを入れ、実際1年間は仕事に用いていました。こうした行事からは大工たちの1年間無事に



写真① 大工の技術書

大工仕事ができるようにとの願いやそのうえで道具をいかに大切に考えていたかがうかがえます。

家屋が組み上がっていく各工程の節目には様々な建築儀礼が行われますが、棟木をあげる上棟式では大工、左官等の職人、親類、手伝いを全員呼び、榊をつけた御幣を棟の東にくくり、お供えをして、御幣に向かって柏手を打って拝みます。さらに施主や棟梁が棟木を木槌で叩き込め、その時餅を撒いたりもしました。御幣については、山田にその形に関するいわれが伝承されています。それは上棟式の御幣(写真②)は上部の3つの扇が頭で、半紙と水引でくくる部分が腰巻きであり、女性をかたどったものであるというものです。その理由は昔、左甚五郎が寄棟の家を作った時、棟上げの前日に母屋(棟や軒桁に平行して垂木を支えるために渡した横木)が1本短いのがわかり、棟上げを明日に控えてどうしようもなく途方にくれていると、妻が1本短い部分を入母屋にする方法を教え、無事に棟上げをすませることができました。そこで妻の功に関連させて御幣は女性をかたどったものにするといいます。妻と女性をかたどる御幣の関係が充分伝承されず、意味がつかみにくいものとなっていますが、上棟式においてその際使われる御幣が女性をかたどったものであるといったり、あるいは女性に関係する化粧道具、あるいは女性の人形や髪の毛等を飾るという行為は各地に伝わっています。なかでも京都の千本釈迦堂には上棟式の御幣におかめの面をつける理由が伝わっており、山田の伝承とたいへん似ています。それは、昔、長井飛騨守高次という大工が本堂を建立する時、誤って柱を1本短く切ってしまい、難渋していたところ妻のおかめが枡組の工夫を教えて匠は見事にお堂を完成させます。しかし、おかめは出過ぎたことをしてしまったことを恥じて自害し、そこで匠は以後棟上げのたびに女房を

大工の神として祀るようになったというものです。境内にはおかめを祀ったおかめ塚(写真③)があり、多くの建築業者から信仰を集めています。そして、釈迦堂の場合は妻のおかめは自害したことになっていますが、その他多くの場合、大工の危機を助けるのは妻や娘といった女性であり、そして、それが知れ渡るのを恐れた大工によって殺され、その祟りを恐れて上棟式には女性に関するものをお祀りするようになったと伝えています。おそらく山田の伝承も同様に秘密が露見するのを恐れた左甚五郎によって妻は殺されたとする部分がかったものと思われます。

こうした伝説の背景には、大工が扱う建築材料である木に関して、常日頃材料として助けられながらも常に切り刻み、殺し続けている樹木の霊(木霊)がこの女性に象徴され、木霊への感謝と恐れがこのような伝説を作り上げていき、棟上げの機会に犠牲になった木霊を鎮め祀り、さらにこれを家屋の守護神として祀りあげるようになったためではないかと考えられています。

[参考文献] 神野善治『木霊論』2000年 白水社



写真② 上棟式の御幣



写真③ おかめを祀る宝篋印塔
(おかめ塚)
千本釈迦堂 大報恩寺

蘇民将来札 —豊嶋郡条里遺跡—

昭和58年（1983）、^{てしまぐんじょうり}豊嶋郡条里遺跡（吹田市泉町2丁目）の発掘調査において2点の木札が出土しました。木札に赤外線照射し調査したところ、それぞれに^{ぼくしよ}墨書文字が確認され、その文言から呪^{じゆ}符木簡（まじない札）のひとつの「蘇民将来札」であることがわかりました。

このときの発掘調査では、豊嶋郡条里の東限を区画する南北ラインに相当する中世期の水路と水田面が検出されました。2点の木札は中世の水田を形成する地層から出土したもので、付近の集落で使用されていたものが流され埋没したと思われる。水路構築の時期と出土遺物から12世紀末～13世紀半ば頃のものとして推定できます。

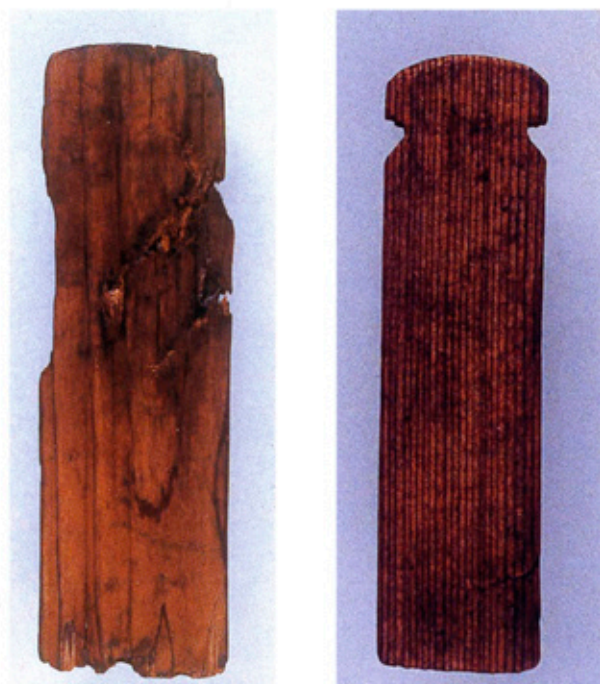
札1（写真左）は下半が欠けていますが、残存長は165mm、幅50mm、厚さ6mmで、蘇民将来札としては大型で珍しいものです。文字は上端から書き始め「蘇民将来之子孫」と読めます。

札2（写真右）はほぼ完全な形で出土しており、長さ92mm、幅24mm、厚さは5mmです。上部両端に

は切り込みがあります。文字は上半に「蘇民」と書かれているのですが、以下に文字が有るのか無いのかは判然としません。

「蘇民将来」とはある伝承上の人物の名前で、文献では『備後国風土記』^{いつぶん}逸文にみえます。逸文とは原本は失われたけれども、他の書物に引用された形で現在に伝わっている文章のことをいいますが、次のような話が『備後国風土記』の文章として鎌倉時代中期に書かれた『新日本紀』（『日本書紀』の注釈書）に載っています。

北の海に住む武塔神^{むとうのかみ}が南の海に住む神の娘に求婚に出かけたところ、途中で日が暮れてしまいました。そこで、蘇民将来と弟の（巨旦）将来に宿を請いましたが、裕福な弟将来はそれを拒み、貧しい兄蘇民将来は歓待しました。年を経て、再び武塔神は蘇民将来のもとを訪れて先年の謝意を示し、蘇民将来の妻や子に茅の輪を腰に着けるように言いました。その夜、武塔神は蘇民将来の一族を除き、茅の輪を身に付けていない全ての者を殺



蘇民将来札1

（通常フィルムによる写真）

蘇民将来札2



赤外線撮影によって明らかになった蘇民将来札の実測図

し、「私は速須佐雄神である。後の世に疫病があれば、蘇民将来の子孫を名乗り、茅の輪を腰に着けていれば、その災いを免れるであろう。」と言ったのです。

蘇民将来の子孫と称すれば疫病に罹らないという説話は『祇園牛頭天王縁起』にもみられます。武塔神が牛頭天王（中国より伝来した疫神）と同化し、牛頭天王を信仰する祇園信仰とともに蘇民将来札による疫病退散・家内安全・招福などの祈願が広まり、中世以降には非常に盛んになりました。現代においても蘇民将来の護符や茅の輪くぐりの行事としてその信仰は続いています。

蘇民将来札の出土例は全国では50点を超えます。関東から近畿地方まで分布していますが、大阪府内は出土数が約20点あり、多い地域です。

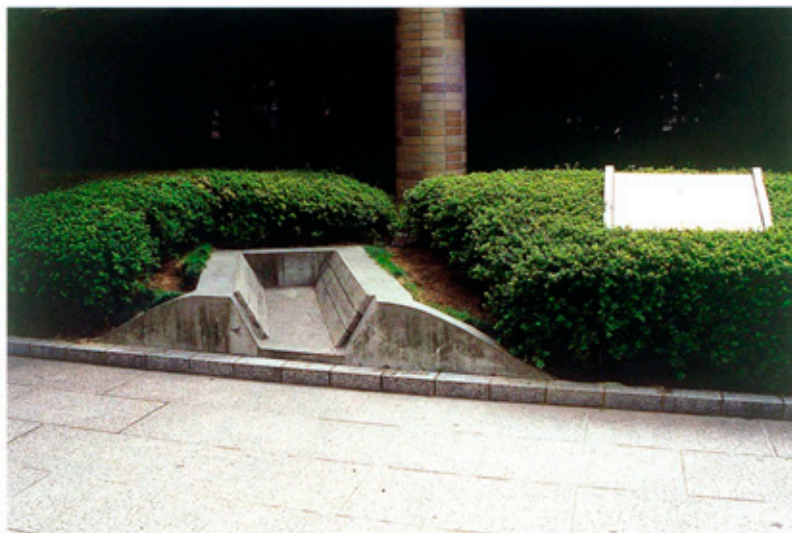
出土した札は中世のものが多くのですが、最古の例は長岡京跡（長岡京市）で出土した8世紀後半のもので、長さ27mm×幅13mmと非常に小型です。「蘇民将来之子孫者」と墨書し、上部には小さな孔が開けられ、中心付近には木釘が打たれていました。孔は紐通しのためと思われ、現在のお守りのように携帯したのでしょうか。また、壬生寺境内遺跡（京都市）でも9世紀初めの蘇民将来札が出土しており、すでに長岡京時代～平安時代初めの頃には、蘇民将来札が使用されていました。

札の使い方は、上述のように身に着ける他に、家の門戸の柱などに括り付けるか、吊り下げるかあるいは土中に刺して使用したと考えられています。長曾根遺跡（堺市）では、表に「昔蘇民将来子孫住宅也」、裏に「招福門」と記した札が出土していますが、両面の墨痕などの遺存状態の違いから一方は風雨に晒され、他方は柱などに密着していたものと推定されています。大型の札1はこのように門戸に掲示して、家中への災いの侵入を防ぐために使われたのでしょうか。欠損部分に「家」や「(住)宅」などの文字があったのかもしれません。

豊嶋郡条里遺跡の近隣では、西方2.6kmにある小曾根遺跡（豊中市）で、平安時代後期～鎌倉時代の蘇民将来札4点が出土しています。豊嶋郡条里遺跡よりやや古いか同時期のものです。いずれも札2と同様に上部に紐かぎりの切り込みがありますが、長さが15cm以上あります。「蘇民将来之宅也」や「蘇民将来之家……」と書かれ、これらの札が門戸に掲げられていた可能性もあります。札2も同様に掲示用とも考えられますが、形態的には類似しているものの長さが半分程度と短く、携帯用とみることもできます。

小曾根遺跡は豊嶋郡条里内に形成された小曾根村に相当し、豊嶋郡条里遺跡とは榎坂郷（垂水村・榎坂村・小曾根村・穂積村）というひとつの地域としてまとまりを持っていました。特に榎坂村以西では、中世には牛頭天王あるいは祇園神祠と称した原田神社（豊中市岡町）を産土神として祀り、また、文献史料から中世後期には郷内の村落行事は牛頭天王に関わるものが中心であったことが知られ、牛頭天王（祇園）信仰が当時の人々の生活に深く根付いていたようです。

今回紹介した2点の蘇民将来札は、この地域のその信仰の具体的な姿を示し、信仰の広まりの歴史的経緯や中世の人々の精神世界を解き明かす上でも貴重な資料です。



豊嶋郡条里遺跡の中世水路復元
（メイシアター東側・いずみの園公園内）

催し物のご案内

展覧会

4月29日(祝)～6月6日(日)

平成16年(2004)度特別展

「ことのしらべー琵琶法師から当道座へー」

休館日 5月6日・10日・17日・24日・31日

講演会

いずれも午後2時より当館講座室。無料。

5月30日(日)

「琵琶法師と平家物語」

講師 相愛大学 教授 砂川 博氏

6月6日(日)

「箏・ことはじめ」

講師 滋賀大学 非常勤講師 井口はる菜氏

※申込不要、当日直接博物館へ。先着120名。

演奏会

いずれも午後2時より当館講座室。無料。

5月9日(日)

平曲(平家琵琶)「那須与一」他 今井検校勉氏

5月23日(日)

八橋流箏曲「九段」他 清水良氏・横田裕子氏・川井純子氏・てん仁智氏

※申し込みは演奏会名、住所・氏名、参加者人数、電話番号を記入のうえ、はがきまたはFAXで博物館へ。

4月25日(日)必着。定員120名。多数の場合は抽選。

歴史講座

5月22日(土)

「吹田村の生業についてー明治初年の史料からー」

当館学芸員 田口泰久

5月29日(土)

「古墳時代の吹田ー集落遺跡の動向ー」

当館学芸員 高橋真希

6月5日(土)

「摂津の万石とおしーその製造と流通ー」

当館学芸員 藤井裕之

※いずれも午後2時より当館講座室。無料。

先着120名。

博物館トーク

4月18日(日) 「淀川兩岸一覽を読む」

当館学芸員 田口泰久

5月16日(日) 「岸部のどんじ祭」

当館学芸員 藤井裕之

6月20日(日) 「古墳時代の鉄剣ー五反島遺跡ー」

当館学芸員 高橋真希

7月18日(日) 「不動明王の信仰」

当館学芸員 滝沢幸恵

8月22日(日) 「古代復元コトを弾いてみよう!」

当館学芸員 望月直子

9月19日(日) 「吉志部瓦窯H-1号窯を考える」

当館学芸員 藤原 学

※いずれも午後2時より当館講座室。無料。

5月16日(日)には特別展の展示解説も併せて行います。

ホームページURLの変更のお知らせ

<http://www.suita.ed.jp/hak/index.html>

に変更となりました。

交通案内

●JR岸辺駅下車徒歩25分

●JR吹田駅・阪急吹田駅から

桃山台駅前ゆき、山田樫切山ゆきバス

「佐井寺北」下車徒歩10分

千里中央ゆき、阪急山田ゆきバス

「岸部」下車徒歩10分

●JR吹田北口から

五月が丘南ゆきバス

「五月が丘西」下車徒歩7分

●阪急南千里駅から

JR吹田ゆきバス②、③系統

「佐井寺北」下車徒歩10分

吹田市立博物館だより 第22号

平成16年(2004)3月31日発行

吹田市立博物館

〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号

TEL. (06) 6338-5500 FAX. (06) 6338-9886



●開館時間 午前9時30分～午後5時
●休館日 月曜日と祝日の翌日
年末年始(12月28日～1月4日)